

鉛筆印のトレーナー

庄野

鉛筆印のトレーナー

庄野潤三



福武書店

鉛筆印のトレーナー

一九九二年 五月一日 第一刷印刷
一九九二年 五月一日 第一刷発行

著者 庄野潤三

発行者 福武總一郎

発行所 株式会社 福武書店

東京都千代田区九段南二一三一二八
〒〇三電話〇三三三三〇一三三
振替口座(東京) 六一〇五〇九七

本文印刷 大日本印刷

平版印刷 栗田印刷

製本所 小泉製本

(落・乱丁本はお取替え致します)
(定価はカバーに表示しております)

庄野潤三(しょうの じゅんざう)
一九二一年、大阪府に生まれる。
九州大学東洋史学科卒。五四年、
『ブールサイド小景』で第三二回
芥川賞、六〇年、『静物』で第七回
新潮社文学賞、六五年、『夕べの雲』
で第一七回読売文学賞、六九年、
『紺野機業場』で第二〇回芸術選奨、
七一年、『総合せ』で第二四回野間
文芸賞、七二年、『明夫と良二』で
第二回赤い鳥文学賞・第二六回毎
日出版文化賞を受賞。五三年には、
オハイオ州のケニオン大学から文
学博士の名譽学位を受けた。他に
著書として『浮き燈台』『エイヴ
オン』『ザポンの花』『懐しきオハ
イオ』『葦切り』、『庄野潤三全集』
全一〇巻など多数。

鉛筆印のトレーナー

午後、日の差し込む六畳の間で妻は明日のお雛さまの日にフーちゃんに上げる人形の仕上げをする。ひろがったスカートの下に小さなバスケットが附いているお人形だ。このバスケットにお菓子でも何でも入れて、指で持ってお人形ごと連れて歩くようになってゐる。「バスケット・ドール」という。

お雛さままでに作ろうとこの間のうちからかかっていたのが、ぎりぎりになった。材料を買ったのは、去年の十月。小田原に近い南足柄市に住む長女から、末の子の正雄の行っている幼稚園で手作りのお人形を作つて来るようにいわれたので、助けてくれませんかと頼まれた。お願いがあるんだけどと先ずいつてから、頼みごとを電話で話した。

何でも十年に一回とかの役所の視察があつて、そのとき、手作りの人形で園児が遊んでいるところを見せなくてはいけない。それで、手作りの人形がどうしても要ることになって、父母会の役員をしている長女のところへ人形作りの仕事がまわつて来たというのであつた。

長女から電話がかかった翌日、妻はいつも手芸の材料を揃えるときに行く東京の店へ出かけた。ところが、その日は「バスケット・ドール」の材料しか無かつた。バスケットのなかに服やエプロンにする切れとか、綿とか、髪の毛にする毛糸が、作り方を書いた紙と一緒に入ってい

る。人形にかぶせる麦藁帽子（これは出来上りのがひとつ）も入っている。何もかも必要なものが小さな茶色のバスケットに入っている。

しかし、長女が欲しい人形は、もっと大きいものでないといけないだろうと考えた妻は、新宿の百貨店へ行つて、手芸品売場で人形の材料を買った。どうしてその百貨店に人形の材料があると分つていたかという、もう大分前のことだが、フーちゃんの初節句のときに手作りの人形を妻は上げたからだ。金髪、小さな人形を作つて、上げた。フーちゃんというのは、次男のころの四歳になる孫娘で、私たちの孫のなかでただ一人の女の子である。去年の三月に下に男の子が生まれて、お姉さんになった。

長女に頼まれた人形は、髪だけ残して大方、妻が作った。最後に南足柄から正雄を連れて来た長女が半日がかりで髪を作り、目と口を刺繍で入れ、頬紅をつけて仕上げた。いい人形が出来た。あとで長女から届いたお礼の手紙には、夜、スタンドの明りで人形をつくづく眺めている仕合せな気持が書いてあった。あの手紙、どこかにあるだろう。長女から来た手紙や葉書は、「足柄山便り」と表に書いた封筒のなかに保存してあるから、見つかるかも知れない。私はここで書斎の仕事机の上から「足柄山便り」の封筒を取り出し、たちまち望みの長女の手紙を見つけ出したので（「ローラ人形を持つて帰った日」と封書の表に鉛筆で書いてあった）、その一部分を書き写してお目にかきたい。

台風も去つて、虫の鳴き声だけ聞える静かな夜です。いま、目の前であのローラ人形がスタンドの明りに照らされて頬笑んでいます。うす茶色の髪をおさげにして、モスグリーンのリボ

ンを結び、緑の地に赤と白の細いチェックの長袖のワンピースを着て、その上にレースの附いた白のエブロンを着け、髪と同色のスウェードの靴を履いて、頬をぽつと染めてつぶらな瞳で笑っているの。本当に何度眺めても見飽きないほど、可愛らしいです。まるで心があるみたい。超多忙なお母さんにお願ひして、こんなに素晴らしいお人形を作っていただいて本当に本当にありがとうございます。電話でお願ひした翌日にすぐ新宿まで飛んで行って材料を揃え、早速お洋服を縫い始め、毎日、朝は十時から十二時、午後は一時から五時までかかって、細かいお洋服の部分を丁寧に仕上げてもらったお蔭で、昨日一日で完成しました。私は、髪の一つ一つを編みを結って、頬紅をつけただけです。忙しいお母さんに殆ど作っていただいて申し訳ありませんでした。木洩れ陽の入る静かなお部屋でのお人形作りは、本当に楽しかったですね。布と毛糸でこんなお人形が出来るなんて。何かを作り上げるといふのは素晴らしいことですね。アデランスの作り方も分ったし、いつか役に立ちそう！ いまはただひたすら、このローラちゃんをわが家に置いておきたい誘惑と戦っています。(後略)

なぜこの人形にローラちゃんという名前がついたかという、長女に頼まれた人形を作っている間中、妻は以前読んだアメリカの作家のワイルダーの『大草原の小さな家』の主人公の少女ローラを頭においていたので、長女にそのことを話したら、長女が、このお人形、ローラちゃんにしようといった。

そんなわけで妻が手芸の材料店で買った「バスケット・ドール」の材料は、そのまま妻の手もとに残った。ただ、長女に頼まれた人形を作ったときから、孫のなかのただ一人の女の子である

フーちゃんにこんなお人形を作って上げたくなった。そのうち、クリスマスが近づいた。或る日、ミサヲちゃん（というのはフーちゃんのお母さんである）に、

「今年はサンタクロースの贈り物、何にしようかしら？ 去年はお弁当箱だったけど」

といった。フーちゃんにお人形を作って上げようかなと考えているんだけど、というと、ミサヲちゃん、

「お母さん、作ってくださいますか？」

私はお人形、作ろうかと考えていたところなんですという。

さてとなると大仕事だから、二人とも、はつきりと自分が作るといい出さないうちに、ちよつとサンタクロースの贈り物のお人形を作る役目を押しつけ合うかたちになった。そのうち日がたち、そろそろ切羽詰まって来たころ、

「やっぱり、サンタクロースのお人形、私が作ります」

とミサヲちゃんが妻にいった。

日には無いし、用事はいっぱい詰まっていたときだから、妻はほつとした。フーちゃんにお人形を作って上げたいとずっと思っていたから、がっかりしたけれども、やっぱりお母さんのミサヲちゃんを作る方がフーちゃんのためによかったと考え直した。

妻は、長女がローラちゃんを作るときに持つて来た、手足の材料にするクリーム色のメリヤスや、服地の端切れ、リボンいっぱい、毛糸などをきれいなお菓子の空き缶に詰めて、

「役立てて頂戴」

と行って近くに住んでいるミサヲちゃんのところへ持つて行つた。

ミサヲちゃんの人形は、クリスマスまでに出来上った。ミサヲちゃんがあとで持つて来て、妻に見せてくれた。小花模様のワンピースに白のエプロンを着けている。髪はローラちゃんと同じように三つ編みにしている。

「いいお人形、作ったね。こんな可愛い人形、見たことないわ」

と妻はいった。大きな、しっかりと作ったお人形であった。ミサヲちゃんは、結婚するまで長女の住んでいる南足柄の染織工芸家のところで研究生として染織の仕事をしていただけあって、手先が器用なのであった。筋向いの長女の家へよく遊びに来ていた。いい娘さんなので、長女が気に入る、次男のお嫁さんにどうだろうと考え、縁談の橋渡しの役をしたのであった。

ミサヲちゃんが作った、「サンタさんの贈り物」のお人形を見て、フーちゃんはよろこんだ。「くるみちゃん」という名前がついた。妻は、やはりミサヲちゃんが作ってよかったと思った。

フーちゃんが可愛がつているので、もうお人形を上げることは出来ない。くるみちゃんと重なるから、二つは要らない。その代り、「バスケット・ドール」なら、お菓子でも色紙でも何でも入れて、手にさげて持ち運びできるからいい。そう考えた妻は、去年の十月に買って来たまま残っていた「バスケット・ドール」の材料を使って、人形を作って、今年のお雛さまにフーちゃんに上げることにしたというわけである。これなら「くるみちゃん」の邪魔にはならないだろう。書き落していたが、ミサヲちゃんは、サンタさんの贈り物だから、作っているところをフーちゃんに見られてはいけないので、夜、フーちゃんが寝入ってからお人形を取り出して作っていたそうだ。

妻は、「バスケット人形」の顔に、これから口を入れなくてはいけない。早春の午後の日がい

っぱい差し込む部屋である。私はその横で新聞をひろげている。

フーちゃんは、今年の四月から幼稚園に入る。みどり幼稚園という名で、二年保育の年中組に入る。

二日前に宝塚歌劇団花組の日本青年館ホールでの公演を観に出かけたとき、駅へ行くまでの道で長男の嫁のあつ子ちゃんが、

「昨日は、フーちゃんの一日入園の日でした」

と話した。長男夫婦は、次男夫婦と同じ大家さんの、隣り合った家作に入っている。フーちゃんは、よくあつ子ちゃんのところへやって来る。このごろはどうか知らないが、前は、ときどき、あつ子ちゃんの家で、

「ごはん」

といい、小さなおにぎりをあつ子ちゃんに作ってもらって、食べることがあったらしい。フーちゃんは御飯が好きで、それも焼飯とかまぜずしのような、何か雑ったものは嫌いで、白いままの御飯が好きなのである。お母さんのミサヲちゃんが栃木県の米どころの氏家の出身なので、生れながらにお米好きなのかも知れない。

あつ子ちゃんは、フーちゃんの一日入園のことを駅へ行く下り坂の道を歩きながら、いちばんに私と妻に話した。

「けさ、ミサヲちゃんが話しに来ました。そしたら、まだバジャマ姿のフーちゃんがあとから来て、いわないでとミサヲちゃんにいました」

どうして「いわないで」とフーちゃんはいったのだろう。きつとミサヲちゃんが昨日の一日入

園のことをあつ子ちゃんに話すと思つて、恥かしかつたのだろうか。フーちゃんはがむしやらなところもある代り、内気で、恥かしがりの照れ屋なのである。

「どうだつたんだろう、一日入園は？」

と私がいった。

「フーちゃんは楽しかつたらしいです。ミサヲちゃんは、フミ子より大きい子がいたといつて、よろこんでいました」

ミサヲちゃんは、前からフーちゃんが大きいといつて気にしている。甘い物なんかあまり食べさせないようにしている。運動ぎらいの子なら太る心配はあるかも知れないが、フーちゃんは身体を動かすのが好きだ。中でも走るのが好きで、あつ子ちゃんによれば、昼間、よく家の前の道をひとりで、「ファイト、ファイト」といいながら走つてまわっているらしい。妻がフーちゃんの好きなバス通りの店へ連れて行つてやるために一緒に次男の家を出ると、たいがい走り出す。なかなか速い。

今年の正月に南足柄の長女の一家六人が泊りがけで来て、いつものようにみんなが集まつて夕食を食べたときのことだが、中学生で大きなイギリスの柔道の選手を倒して世界チャンピオンになった女の子の話が出た。長女がテレビでみたら、その子があどけなくて、とても可愛かつたといつて、まわりから、そうだ、可愛かつたねという声が出た。

このとき、長女が斜め向いでみんなと同じようにおせち料理の皿を前にしたフーちゃんの方を見て、

「フーちゃんも柔道をやればいら」

といった。

それがいいといい出す者が出た。私もその中の一人であった。柔道世界一になった小柄な日本の中学生の女の子とフーちゃんとが重なったのである。みんながフーちゃんを見た。すると、フーちゃんは、

「走るのがいい」

といった。

フーちゃんはどこまでも走りたいらしい。そういわれれば、陸上競技部のひとかたまりの選手のなかに入って、黙々と走っているフーちゃんも悪くないという気がして来る。

いつか妻と二人でフーちゃんの運動について話をしていたら、妻が、陸上競技だったら長距離ですか、マラソンなんかは細い身体をした人が多いようですけどといった。そうだな、長距離は向かないかも知れないなと私はいった。

「短距離が向いているんじゃないか。ああいう豆タンクみたいな身体つきの子は、短距離がいいんだ。或る程度、体重がある方がいいんだ」

そんなことを話しては二人で楽しんでいるのであった。女の子だからといって、バレエを習わせようというようなことは、妻も私も考えない。豆タンクのような子だから、バレエには向かない。柔道がいいか剣道がいいかということなら取り上げるが、バレエやダンスは最初から取り上げる気がない。

「人形に口を入れないと、フーちゃん、口がないというから」と妻がいう。

そうだな、入れた方がいいなといっておいて、こちらは新聞を見ている。暫くたって、今度見たら、赤い糸でうまい具合に口を入れてあった。

「いよいよ、いよいよ」

というとき、妻はほっとしたようだ。これで出来上り。

目は、もう入っている。黒のビーズ玉が「バスケット人形」の材料のなかに入っていた。服にする切れなんかと一緒に小さなセロファン製の袋に入っていた。「作りかた」の紙には、口 of 材料は入っていない。この「バスケット人形」は、目だけで、口はつけないようになっていた。だが、「口なし」だとフーちゃんが「口がない」というに決まっているから糸で入れた。

「目はどういうふうにして附けた？」

と訊くと、妻は、人形のあたまのうしろから針を通してビーズ玉をとめたのといった。ビーズ玉に穴が明いているので、糸を通して、とめて、またあたまのうしろへやって結んだという。

麦藁帽子をかぶった人形なのだが、その麦藁帽子も可愛い。

「フーちゃんは、きつと脱がせるから」といい、妻は麦藁帽子が外せないように、毛糸の髪に頭で縫いつけてしまった。実際、フーちゃんは、家へ来て、人形で遊ぶときなんか（この人形は手作りではなくて、妻がフーちゃん用に百貨店で買ったものだ。フーちゃんはリリーちゃんという名前をつけた）、かぶっている帽子を脱がせ、靴を脱がせる癖がある。たちまち脱がせてしまうのである。リリーちゃんの帽子は、まるい、黒いビロードの帽子で、ゴム紐が附いている。「バスケット人形」の着ているエプロンのうしろは蝶結びになっているのだが、これもフーちゃんがほどこけないように、糸で結び目をとじつけてしまった。エプロンを脱がせられないようにし

た。これで出来上り。

三月三日、雛の日を迎える。いい天気。

午前中に妻は「山の下」のあつ子ちゃんに電話をかける。

「あつ子ちゃん、今日、おすし作る？」

作りますといった。もし作らないといえ、おすしを作って持って行って上げるつもりで訊いてみた。次にミサヲちゃんに電話をかける。

「今日、おすし作る？」

ミサヲちゃんのところも「作ります」と返事したらしい。

「フーちゃんに上げたいものがあるから、持って行くわ。ミサヲちゃん、いる？」

すると、次男が会社が休みで家にいるが、今日はサッカーの試合のレフェリーを頼まれて昼から出かける、その前にフミ子を連れてお買物に行きますから、寄ります。長くはいられませんが、十二時ごろに、とミサヲちゃんがいった。

「どこもおすしを作るつもり。いいことだわ」

と、電話を長男のところと次男のところと「山の下」(と私たちは呼んでいる。家の前の坂道を下りて行った先に住んでいるから)の二軒にかけ終った妻はいう、もし作らないのなら、妻はいつものまぜずしを作って配るつもりでいた。あつ子ちゃんのところもミサヲちゃんのところもおすしを作るといった。で、どうするのかと思ったら、妻はうちはうちで「かきまぜ」を作っていて、いつも丹精した薔薇の花を届けてくれる近所の清水さんに上げるつもりでいる。

昔、家で何か人の寄ることがあると、母が大きなすし桶にいっぱいまぜずしをこしらえた。それは父母の郷里の四国の阿波のまぜずしで、「かきまぜ」と呼んでいた。家で何かあると母が作る。それは父の好物であつた。子供たちもこのまぜずしをよろこんだ。それぞれ別々に煮た高野豆腐、椎茸、人参、きぬさや、薄揚げが入っている。そこへちりめんじゃこと胡麻が加わる。出来上ったら、上に錦糸玉子と海苔をかける。

「かきまぜ」を母が作るところを見ていた妻は、作り方を覚えてしまった。そうして、父も母も両方とも亡くなつてしまつてから、ずっと自分で作っている。お盆に作る。父の命日、母の命日、戦後に亡くなつた私の長兄の命日に作る。お雛さまの日に作る。書斎のピアノの上に父母の写真があつて、作つた「かきまぜ」は写真の前にお供えする。父母長兄の命日やお盆、雛祭り以外にも、ときどき食べたくなつたときに臨時に作る。「かきまぜ」を作つた日は、「山の下」の長男、次男のところへ妻は配つてやる。この「かきまぜ」を御夫婦でよろこんで下さる清水さんにも届ける。

ミサヲちゃんがフーちゃんを連れて来ると妻から聞いたので、
「久しぶりにフーちゃんの顔が見られる。楽しみだな」

という、妻は、

「長くいられませんけど、ミサヲちゃん、いつてましたけど」

といった。暫くフーちゃんの顔を見ていないのである。二月の十七日に長男の勤めている新宿のヒルトンホテルに子供と孫が集まつて、中国料理の卓をかこんで私の古稀の祝いをしてくれたとき以来ではないだろうか。そうかも知れない。

そのとき、出席した者が一人ずつ何かお祝いの言葉を述べた。ミサヲちゃんの番になったとき、

「フミ子と一しよに歌をうたいます」といった。

フーちゃんは呼ばれたのに出て行かない。そこで代りにその前に自作のお祝いの漢詩を朗読した次男が出て、ミサヲちゃんと次男の二人で、簡単な仕草の入った「大きな栗の木の下で」の歌をうたった。フーちゃんは自分の椅子から動こうとしなかった。

その代り、みんなのお祝いの言葉が終ったあと、私と妻の二人のために花束を贈る番が来たとき（進行役は長男が勤めた）、長女の末の子の正雄とフーちゃんの二人が花束を私たちのところへ持って来た。正雄は妻に渡し、フーちゃんは私に渡した。この花束贈呈の役目は、ちゃんとやっていた。ひとりだけだったら、あるいは恥かしがっていやだといいい出したかも知れないが、正雄といっしょだから、よかった。私たち夫婦は会食のあと、フーちゃんに貰った花束をかかえて帰宅した。

帰りの小田急線では、私の隣に去年の三月に生れた春夫を抱いた次男が坐っていた。日曜日の午後の早い時間のせいか、電車のなかは空いていた。（小田原に近い南足柄から来た長女の一家は、ロマンスカーで帰った）フーちゃんは、はじめ向い側の席の妻のよこにいたのだが、発車しない前に次男のとなりのミサヲちゃんのところへ来て、ミサヲちゃんにもたれてるうちに眠ってしまった。

次男が私に話した。